東海古代研究会　　令和八年

東海の古代

第305号　2026年1月

会長　：　宮澤健二
編集　：　石田泉城　　投稿先アドレス：toukaikodai@yahoo.co.jp
ＨＰ　：　http://furutashigakutokai.g2.xrea.com/index.htm

令和８年の年頭に当たって

東海古代研究会　会長 宮澤 健二

新年あけましておめでとうございます。

昨夏より会長を引き継ぎ、何もできずに新年を迎えてしまいました。古田史学の流れを汲む本会を代表し、「古代史セミナー」の企画・運営にもかかわらせていただきましたが、力不足は否めませんでした。新年を迎え、古代史研究に一層励む決意を新たにいたしたところでございます。

さて、本会への加入当初より、会誌名が「東海の古代」であることが気になっておりました。『魏志』倭人伝や『日本書紀』に基づく議論では、九州やヤマトが中心になることは已むを得ないことではあります。しかし、纏向前夜の東海は独自の展開を示しており、朝日遺跡の示すところ、唐古・鍵遺跡以上の特色があると言えます。『日本書紀』に東海地方の存在感が乏しいことには、何らかの編纂事情が含まれているのだと考えられます。

東海地方に居住する利点を生かした研究を心掛け、古代日本の全貌に迫ることに繋げたいものだと思っております。

倭と倭人（２）

小牧市　宮澤 健二

５　『論衡』の倭人は鬱人である

出野正は著書『魏志倭人伝を漢文から読み解く』（明石書店、2022年）において、『論衡』（王充著、後漢）内の倭人に関する記述が、同一の事柄を記述していると断じている。

- 「成王の時、越裳雉を献じ、倭人暢を貢す」（恢国篇）
- 「白雉越より貢せられ、暢草宛より献ぜらる」（超奇篇）
- 「周に於いて生えていた暢草を使う時、天下太平にして、人来たりて暢草を献ず」（異虚篇）
- 「周の時は天下太平、越裳白雉を献じ、倭人鬯草を貢す」（儒増篇）

その根拠として、恢国篇において九夷の地名、巴・蜀・越(えつしゅん)雋(うつりん)・鬱林・日南・遼東・樂浪が連記されており（この時代には日本列島は九夷にも入っていない)、朝貢記事は九夷に関するはずであること、『説文解字』の鬱の項には「**鬱鬯は百艸の華、遠方鬱人の貢する所の芳艸なり**」と記されること、さらに、宛＝鬱（ウツ)、暢＝鬯（チョウ）であること等を論拠としている（国名の宛は、西域のイメージだが、「正字通」には宛は鬱に通ずとある)。そして、『論衡』の倭人は鬱人であると結論付けている。

そもそも、日本列島に倭族が移住してきたことによって弥生時代の黎明があるのであり、縄文時代である周の成王（紀元前1021年没）の治世に、縄文人が中国と交易したとしても、倭人と記録されることはなかったと考えられる。

６　『漢書』の倭人は国名である

張莉は、『漢書』から『新唐書』における日本列島に関する以下の記述例に基づき、倭人は国名であることを論じている。

- 『漢書』「**樂浪海中有倭人.....**」
- 『魏志』倭人伝「**倭人在帯方東南海之中、…**」
- 『後漢書』倭伝「**倭在韓東南大海中、…**」
- 『宋書』夷蛮伝・倭国「**倭国在高驪東南海中、…**」
- 『晋書』四夷伝倭人「**倭人在帯方東南海中、**」
- 『隋書』俀国伝「**俀国在百済・新羅東南、…**」
- 『旧唐書』列伝23「**倭国者、古倭奴國也。去京師一萬四千里、在新羅東南大海中**」

『漢書』の「**樂浪海中有倭人**」は「(場所)有(場所)」の構文であるから、この「倭人」は地域名もしくは国名と考えられる。また、『魏志』には「**倭人在帯方東南海之中**」とあり、「有」と「在」の違いがあるが、中国語では初出には「有」を二回目以降は「在」を用いるとのことで、英語の「a」と「the」に似た使い分けをするようである。日本列島の倭人は中国の正史として初出であることを意味していると考えられる。

「倭人」が国名であることは、以下の例からも確かである。

まず、漢代の辞典である『爾雅(じが)』釈地の九夷注に「**李巡曰、一玄菟、二樂浪、三高麗、四滿飾、五鳧更(ふこう)、六索家、七東屠、八倭人、九天鄙**」と述べられ、「倭人」以外はすべて国名のカテゴリーであり、当然のことながら「倭人」も国名と解するべきである。

さらに、『三国志』巻30烏丸鮮卑東夷伝にも、烏丸・鮮卑・扶餘・高句麗・東沃沮・挹婁・韓・倭人と国名が列挙される中に倭人があり、倭人が国(地域)名であることは動かない。なお、『魏志」の「倭人」が国名であると最初に認識したのは松本清張のようである。

７　『魏志』倭人伝は、「倭」と「倭人」を区別している

出野は、「倭人」は朝鮮半島の「倭」と区別するために作られた名称であるとしている。なぜなら、「倭」は『魏志』韓伝に五つ、倭人伝に一つあるが、すべて朝鮮半島の「倭」であり、日本列島に「倭」を用いた例がなく、日本列島には「倭人」をただ一つのみ用いているからとする。したがって、朝鮮にある国としての「倭」と日本列島にある国としての「倭人」は区別して記述されていると考えられる。

ただし、「倭」と「倭人」が区別して表記されているとしても、「倭人」が「倭」の一部（使訳の通ずる30国）を意味することは論理的に排除されていないであろう。その場合、九夷の一つが「倭人」とされたのは、より広い「倭族居住地域」（朝鮮半島南部、倭人、日本列島内の倭人とは別の倭種の国々）の代表として記されたという解釈になる。

上述の論にしたがえば、伝説的地理書『山海経』第12海内北経（３世紀までに成立）の**「蓋國は鉅燕の南、倭の北に在り、倭は燕に属す」**も朝鮮半島の倭を指すことになろう。

８　「倭」と「倭人」の使い分けの整理

出野は、中国史書・朝鮮の歴史を記した『三国史記』『三国遺事』『好太王碑』における日本列島の主勢力と朝鮮半島の「倭」との書き分けを一覧にし、白村江の戦いの前後までこの二つの語は使い分けられていることを論じている。

区分	日本列島	朝鮮半島	備　考
山海経		倭	
漢書	倭人		中国文献では、この期間のみ日本列島の主たる政治国を「倭人」「委奴」と表現している
金印	委奴		
魏志	倭人・倭国	倭	
晋書	東倭, 倭人	倭国	
後漢書	倭・倭国・倭奴国	倭	
宋書	倭・倭国	任那・秦韓・慕韓	
南斉書	倭・倭国	任那・加羅・秦韓・慕韓	
三国史記 三国遺事	倭人 （白村江の戦いまで）	倭・倭国（『三国史記』444年） 倭国（『三国遺事』479年）	
好太王碑	倭人	倭	

※『三国史記』（金富軾ら1145年）、『三国遺事』（13ｃ末、高麗僧の一然の私撰）

(1)　「好太王碑」における「倭」と「倭人」

４世紀末の韓国の状況を正確に映し出した一級資料「好太王碑文」には、「倭」が６回、「倭人」「倭賊」「倭寇」が各１回出てくる。その中に、**「倭人満其国境」**と**「新羅城倭満其中」**とが含まれており、重要な文面において無意味な書き分けを行うとは考えにくいことから、「倭」と「倭人」は区別する意図があったといえる。

その場合、**「而倭以辛卯年來　渡海破百殘」**とあるのは、朝鮮半島の倭が海から攻めたことを表現したことになる。海洋民族の倭が陸続きの地であっても船戦を仕掛けることは不自然ではない。

(2)　『三国史記』新羅本紀における「倭人」と「倭兵」の使い分け

以下は、出野の論旨である。

『三国史記』新羅本紀に登場する「倭人」は、ほとんどが新羅を攻めている軍隊である。「倭人」のほかに「倭兵」という言葉も出てくるが、「倭人」が32回、「倭兵」が10回となっている。例えば、**「倭人、猝（にわ）かに至りて金城を囲む」**（232年）、**「倭兵、東辺に寇す」**（233年）のように、使い分ける理由が内容面で見いだせるわけではない。史書において、単調さを避けるためだけに無作為な変化をつけるとは考えづらく、これらの「倭人」と「倭兵」は使い分けられていると見るべきである。

時期的に詳しく見てみると、444年までに「倭兵」10回、「倭人」が23回、それ以後は「倭人」９回のみで「倭兵」のみならず「倭」「倭国」は皆無となる。白村江の戦い以後は「倭人」も皆無になる。この記録は「倭兵」を朝鮮の「倭」の兵、「倭人」を日本列島の「倭人（国）」の兵とみると、５世紀中頃から朝鮮の「倭」が衰え、やがて白村江で倭人が壊滅する過程とよく対応している。なお、444年以降、『三国史記』では金官・加羅という名称が出現する。

(3) 『三国史記』における「倭国」の記録

新羅本紀の白村江の戦い以後の４つの記事や百済本紀の608年、660年の記事の「倭国」は、朝鮮の「倭」の滅亡後であることから、日本列島の国であることは間違いない。すなわち、『三国史記』では、白村江の戦い以後は、「倭国」という語は日本列島の「倭国」として使われている。しかし、朝鮮の「倭」の消滅以前は、新羅本紀と『三国遺事』にある共通の地名（明活城）事件を基に、新羅本紀や百済本紀の「倭国」は朝鮮半島の「倭」を指すものと出野は考えている。

- **倭兵来たりて明活城を攻め、克たずして帰る。……**（「新羅本紀」、405年）
- **倭兵来りて東辺を侵し、明活城を囲む。功無くして退く。**（「新羅本紀」、431年）
- **己未の年、倭国の兵、来たり侵す。始めて明活城を築き、入りて来るを避く。梁州の二城を囲むも、克たずして還る。**（『三国遺事』王暦第一、第20慈悲麻干条、479年）

この三つの記事から、「倭兵＝倭国の兵」が定立できるとし、倭兵が朝鮮半島の倭の兵であることを前提に、『三国史記』『三国遺事』においては、朝鮮半島の「倭」は「倭国」とも呼ばれ、日本列島の国の軍隊や人を「倭人」と呼んでいたとしている。

このことを踏まえ、新羅本紀の「倭国王使を遣わし、子の為に婚礼を求む。阿飡（６等官）の急利の女を以て之に送る」（312年）や、新羅本紀の未斯欣の人質記事（402年）、「百済本紀」の太子・腆支の人質記事（397年）の「倭国」は朝鮮半島の「倭」であり、「倭王」は朝鮮半島の「倭」の王であると結論付けている。「好太王碑」には、確かに「倭人」が派兵していたことが記載されているが、上記事件の場合は、舞台が朝鮮半島と対馬あたりと考える方が無理なく読めるといえる。

その傍証として、「三国史記」列伝の次の記述を挙げている。

A **「百済人、前に倭に入りて、新羅と高句麗が謀りて王の国を侵さんと讒言せり」**

B **「倭、遂に兵を遣わして、新羅の境外を羅戍す」**

C **「会々、高句麗が来り侵し、并びに倭の邏人（見回りの兵）を虜殺す」**

この記事の前後に朴堤上の事件（未斯欣の帰国）のことが書かれていることから、おそらく400年代初め頃の記事と考えられ、好太王碑の高句麗と「倭」の戦いの頃である。

Aの「倭」が日本列島の「倭」を指すなら、「倭に入りて」とは言わずに「倭に度りて」となるはずであり、百済と陸続きの隣り合わせに「倭」があったからこそ、「入りて」という表現になったと思われる。Cを見ても、400年代の初め頃に、高句麗が日本列島の倭人国を攻めてきたという記録はない。したがって、これらの「倭」はすべて朝鮮半島の「倭」とした方が、確かに現実味を帯びる。

(4) 『後漢書』における「倭」「倭国」

『後漢書』韓伝に**「其南亦與倭接」「其南界近倭亦有文身者」**、倭伝に**「倭在韓東南大海中、…」**の記載があり、前の二つの倭は朝鮮半島、三つ目は日本列島と考えられ、明らかに異なる地域の記述が混在している。また、「倭国」は、倭国大乱、倭奴国が倭國之極南界であること、倭国王帥升のように登場し、日本列島と考える方が自然である。

『後漢書』の成立は432年とされ、『三国史記』における「倭兵」の最終出現年の444年に近い。中国の正史は、先王朝の時代を編纂するため、修史官の生きた時代の地理観に影響を受けざるをえない。朝鮮半島の「倭」が消失するこの時期以外は、倭と倭人の区別を矛盾なく説明できることから、この時期特有の混乱とみることも可能であろう。

また、『宋書』倭国伝の編纂時に朝鮮半島の倭はすでに存在しないため、出野の論に従えば、倭は日本列島の国を意味するが、『三国史記』に記載された「倭の五王」時代の朝鮮半島における軍事行動は、朝鮮半島の倭と日本列島の倭人とによる共同戦線を記述したものと解釈できる。この点は、次節においてより深い議論を試みる。

話はそれるが、『後漢書』には、狗奴国が海を渡った東にあると記載されており、このことが編纂当時の事実を反映しているのであれば、邪馬台国の南にあって交戦した狗奴国が、大和に東遷の後、根を張って崇神朝となったことを示唆し、纒向の登場が自然なこととなる。方角を90°曲げ、邪馬台国を大和に結び付ける必要はない。考古学的な裏付けは現状では難しいが、筆者には魅力的に思えるのだが。

９　倭の五王はどこの王か

(1)　「倭」と「倭人」の統合

出野は、中国史書の『太平御覧』(10世紀、宋)には、東晋の安帝義熙９年(413年)に「倭国」が朝貢に際して朝鮮人参と貂皮を献じている記事があり、この「倭国」は朝鮮半島の「倭」に間違いないと断じている。

好太王碑文には、404年に倭の帯方侵入するも倭寇潰敗の記事があるなど、広開土王時代（391～412年）には倭と交戦し撃滅している。しかし、長寿王の即位直後、倭が413年に高句麗とともに、高句麗産の献上品を携えて朝貢したことが記録され、長寿王は「営州諸軍事」のみを冊封され、朝鮮半島中南部の権益は認められていない（営州は燕国のあった領域)。このことから、長寿王は父王の死とともに、和睦を選択したと考えるのが妥当であろう。出野の論では、この時点の倭王は朝鮮半島の王であるというのである。倭は、413年の高句麗との和睦に到るまで間、最前線で踏ん張る朝鮮半島勢力に加勢する日本列島からの継続的な軍事派遣を頼みに戦い続けたはずである。軍事的同盟関係にあった倭と倭人とが、これを機に統合の道を模索したとしても不自然ではない。ここに、421年に倭王讃が朝鮮半島の広大な領域に関する権益を要求する地政学的な状況が整ったといえる。

(2)　統合した「倭」の代表は

倭王讃は421年宋に朝貢し、**「安東将軍倭国王」**に任じられている。倭王済の場合は、443年に**「安東将軍倭國王」**に除され、451年に**「使持節都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事安東将軍」**として、百済以外の朝鮮半島中南部に対する権限が認められている。443年から451年までの間に、半島情勢に何らかの変化があった可能性がある。上述の『三国史記』において、「倭」の表記が途絶える時期が444年（その後、459年から665年まで「倭人」の記述は10回ある）という事実と符合することから、この時期に朝鮮半島の「倭」と「倭人」（北部九州）とが同盟から、統合「倭」へと移行したと考えるべきである。

統合において、いずれが主となるかを考える場合、領土拡大戦争への寄与度が重要と考えられる。上述のとおり、『三国史記』新羅本紀では、倭兵より倭人の記述の方が多いことから、日本列島勢力は主に新羅方面で、朝鮮半島勢力は主に百済方面で高句麗と対したのではないかと考えられるが､近接する朝鮮半島勢力の方が血と汗を流したであろうから、国際舞台の表に出るのは朝鮮半島勢力であるのが自然であろう。

したがって、倭王の最初二人、讃と珍は朝鮮半島系の可能性が高いと考えられる。倭王が求めた称号に加羅が含まれる点に着目し、そのこだわりから、加羅を拠点とする王との説も出されているが、ありうることである。

ただし、五人目の武の上表文を見る限り、南への領土拡大に関して述べていないことや**「渡平海北九十五國」**の表現（好太王碑の**「而倭以辛卯年來　渡海破百残」**の記事を朝鮮半島の領域内と考える立場では、武の祖先が朝鮮半島の王だとしても許容範囲となるが、「倭人」表現の継続は説明できない）から、日本列島内の王と考えるのが自然である。最初の二人と後の三人との関係が不明瞭である点も、権力移動を示唆しているのかもしれない。済・興・武の三人が日本列島内の王とすると､『三国史記』新羅本紀の459年以降に「倭人」のみが残る理由が理解できる。中国にとっては「倭」であっても、朝鮮半島の人々に

とっては、日本列島の人々はあくまでも「倭人」として区別されたと考えられる。

(3) 倭王と天皇家

朝鮮半島の「倭」と統合した「倭人」を北部九州とした根拠は、国内の考古学的遺物では、吉備や近畿が出雲と結び付いて一定の勢力を誇り、北部九州が孤立的であった形跡があるからである。そのような状況下で、九州の王が朝鮮半島と手を握って国際社会を味方に付ける政策を模索する可能性は十分あると考える。

したがって、倭王と天皇家は無関係であり、『日本書紀』に記載がないのは当然のことである。また、倭王の系図と天皇家の系図に齟齬があるのも当然である。さらに倭王武が梁時代(502年)に「征東大将軍」に昇格しているが、『日本書紀』に照らすと雄略天皇の没後に当たっている。このことも以前から不審とされる点であるが、『日本書紀』の記述の正否を恣意的に判断し、天皇家と結び付ける論法では真実に到達しないように思う。倭の五王の伽耶王説（または九州王説）を真剣に議論すべきではないだろうか。

10　金印の「委奴」とは

(1) 「奴」は入れ墨をした「人」を表現

張莉は論考「金印「漢委奴国王」について」において、「委奴」「匈奴」の「奴」は入れ墨を表現したものであると論じている。

「匈」は、胸に魔除けの × 形の印（おそらく文身）を加えた人を表す象形文字である。したがって「匈奴」とは、胸に文身をした北方民族で、周以後中国王朝を荒らす集団であるため、蔑称の「奴」字を使用されたと考えられる。一方、「委奴」については、顔師古(７世紀、唐)が『漢書』地理志の**「樂浪海中有倭人」**の「倭人」について次のように注釈していることに着目している。。

「如淳曰、如墨委面在帯方東南万里。臣瓚曰、倭是國名、不謂用墨。故謂之委也。師古曰、如淳云如墨委面、蓋音委字耳。此音否也。倭音一戈反。今猶有倭國。魏略云、倭在帯方東南大海中。依山島為國。度海千里、復有國。皆倭種。」

（如淳曰く、如墨委面は帯方東南の万里に在り。臣瓚曰く、倭は国名なり、用墨を謂わず。故に之を委と謂ふなり。師古曰く、如淳、如墨委面を云ふに、蓋し委字の音のみ。此の音は否なり。倭音は一戈切なり。今猶ほ倭国有り。魏略に云ふ、倭は帯方東南大海中に在り。千里を度海し、復た国有り。皆倭種なり。）

如淳(３世紀中、魏)は「倭」の民族的特徴を踏まえ、意図的に如墨委面（墨を塗った顔）と表現したと考えられるが、臣瓚(３～４世紀、晋)は「倭は国名であり、墨を用いる意味ではないから、委と呼ぶ」と言い、それに対して顔師古は、如淳が「墨を塗りつけたように委面す」と言ったのは、委の字を倭の音として用いただけで、音は正しくない(委はイ)。倭の音は「一戈反」（の反切で表される音：ワまたはヲ）であると注記している。顔師古は、委の文字は倭の音を表す文字としては正しくないと注記しているが、如淳がそのことを知らぬはずはない。魏略の**「倭在帯方東南大海中」**と**「如墨委面在帯方東南萬里」**の二文の対比から「倭」＝「如墨委面」が、漢書本文**「樂浪海中有倭人」**から「如墨委面」＝「倭人」は明らかであるから、如淳の真意は浮かび上がる。顔師古の時代には、倭人に黥面の習慣は消失しており、臣瓚の誤りに影響され、真意を読み損なったと考えられる。

また、西晋時代に書かれた『三國志』魏書烏丸鮮卑東夷傳第30には、

「践粛慎之庭、東臨大海。長老説有異面之人、近日之所出、遂周観諸国、采其法俗、小大区別、各有名号、可得詳紀」

（粛慎の庭を踐み、東、大海に臨む、長老説くに異面之人有り、日の出づる所に近し。遂に周りて諸国を観、其の法俗、小大の区別、各有する名号を采り詳らかに紀を得る可し）

とあり、この「異面之人」は発音からみて如淳の「如墨委面」の記述と思われ、黥面の倭人を意味したものということになる。

『翰苑』蕃夷部倭国条（660以前成立）の**「後漢書曰、安帝永初元年、有倭面上国王帥升至」**は上述のような事柄を踏まえた表現と考えられる。

(2) 「委奴」は意訳国名「いな」

金印「漢委奴国王」は、「倭の奴国」「委奴(いと)国」のように30国中の一小国に授けられるはずはなく、一定程度の広域を統合する倭人国王に授けられたはずである。したがって、「委奴」は九州の倭種の国「倭人」に対して漢が公称として与えた国名で、その表記は、おそらく倭人が自らを称する「わ」という呼び名の音訳を避け、上で論じた内容を背景に、意訳的国名「いな」を用いたと考えるのが適当である。本論考の展開と関連付けるならば、朝鮮半島に存在した倭と区別する意図があったと推察できる。「倭」を連想させる「委」の用字は意図的かもしれないが、そのことで注記の混乱が生じたのではあるまいか。

すなわち、『後漢書』東夷伝、『魏志』倭人伝、『梁書』、『旧唐書』などに「倭奴国」と表記されるのは、『漢書』の付注を踏まえ、音訳的な理解の下に記されたと考えるべきであろう。

※　筆者の調べでは、現代中国語でも、外国の国名等は音訳が基本だが、意訳もあるようで、フォルクスワーゲン社は「大衆汽車公司」、ゼネラルモーターズ社は「通用汽車公司」、ニュージーランドは混合型の「新西蘭」だそうである。

まとめ

文化人類学の立場による鳥越、漢籍の立場による出野や張の各論を渉猟し、倭人という用語の多義性に考えを及ばせてきた。ある時期まで、朝鮮半島の「倭」と日本列島の「倭人」とを別の国と捉えることは、国家の形成過程などの歴史観の転換にかかわる重大な点であり、疎かにできないと考えられる。定説を新たな視点で見直し、検討を加えることの重要性に気づかされた。

［追記］「其の北岸、狗邪韓国に到る」の一文

『魏志』倭人伝における次の一文は難解である。

「従郡至倭、循海岸水行、歴韓国、乍南乍東、到其北岸狗邪韓国、七千餘里」

（郡より倭に至るには、海岸に従って水行し、韓国を歴て、乍(あるい)は南し乍は東し、其の北岸狗邪韓国に到る七千余里）

「其北岸狗邪韓国」の「其」は「倭」を指すことは確実である。この「倭」を朝鮮半島の国と考える立場では、「倭」の北岸に到るという表現は通常成立しないが、出野によれば、自分の居場所からの方角を示すのが中国人的な感覚であるとし、朝鮮半島南岸に南から船で近づいたことを意味するとしている。韓国を陸行すれば、南岸に到ると記述されるはずであるという。しかし、倭を朝鮮半島南部の領域にある国とするならば、水行の場合でも、倭の南岸という表現が自然に思えるため、出野のいう「中国人的な感覚」が、実際に同様の用例が中国の文献中にあるか検討する必要があると考える。

別の観点で少し検討を加えると、通常「乍南乍東」は細かく方向を変えて進むことの表現と解釈するが、中国語の表現としては「始めは南、急に東」という解釈が自然であるとする意見もある。この考え方では、動きよりも方角を表す表現ということになり、水行を支持することになる。また、郡からの距離「七千餘里」については、『魏志』韓伝に韓国を「方四千里」と記しており、水行約千里を別にし、南北約四千里×東西約三千里ぐらいに解釈すると、水行で弁韓地域まで七千余里は適当な数値であるが、対角状に陸行すると約六千里（狗邪韓国を伽耶付近に比定）と見積もられる。したがって、この一文のどこにも陸行を想起させる語句がない以上、陸行したと主張することは難しいのではないか。

不弥国の南1400里に女王国

吉川市　堀口 啓一

1　道行き記法と1400里

『魏志』倭人伝の行路記述を読解する手法である連続説と放射説の是非について述べたが、残るは道行き読法[*1)]（あるいは道行き記法）と言う事になる。女王国に関する書籍・学説は多いものの、行路に関する読解では、現時点ではこの説に優る見解は見当たらないように思われる。

道行き読法では不弥国と女王国の距離が零距離（距離が無く接している）と主張されているが、『魏志』倭人伝には国間が無く接している状態の描写が見当たらないので、国間零距離と言う主張は残念ながら成立しにくい。倭人伝には見当たらないが、韓伝には韓と倭が接している記述はある。

- **韓在帶方之南　東西以海爲限　南與倭接　方可四千里**
- **其瀆盧國與倭接界（共に『三国志』『魏志』韓伝）**

韓伝に現れて倭人伝には現れないと言う事は、『魏志』倭人伝の行路記述の中には零距離と言う国間距離は無かった事になる。またこの論説では帯方郡から不弥国までの距離が一万六百里と見做されているので、不弥国から女王国への距離は総里程一万二千里から一万六百里を差し引いた残りとなる1400里と見做すのが正しいと思われる。古田氏の前掲著書にも「千四百里足りない」と悩まれていた様子が描写されているが、この1400里を不弥国からの距離と考えれていれば悩まずに済んだであろうか。陳寿が編纂した際には、史局の史料は次のような文章であったと考えている。

[ ]で囲んでいる箇所は私が脱落等（等と書いているのは他にも理由が考えられるためで、後で触れる）を疑って補足した字となる。

- **南[千四百里]至邪馬壹國　女王之所都　[自郡至邪馬壹國]水行十日陸行一月**

[自郡至]の箇所は[従郡至]でも良い。また[自郡至邪馬壹国]の箇所は[自郡至女王国]でも良い。あるいは別の想定文としては、

- **南[千四百里]至邪馬壹國　[自郡至]女王之所都水行十日陸行一月**

としても良いかも知れない。大した差違では無いかも知れないが、後者の方が脱落した文字数が若干ながら少ない。なお、[千四百里]の箇所は次の文のように[行千四百里]や[陸行千四百里]の方が良いかも知れない。

- **南[行千四百里]至邪馬壹國　[自郡至]女王之所都水行十日陸行一月**

この想定文であれば、水行十日陸行一月は不弥国から女王国への距離では無く帯方郡から女王国への総日程と見做す事になる。しかも不弥国から投馬国は傍線行路となり、不弥国から女王国への行路は主線行路である事が明確となる。不弥国を博多湾沿岸近辺と見做したとして、距離の目安としては対馬と壱岐の1.4倍と言う数値となる。

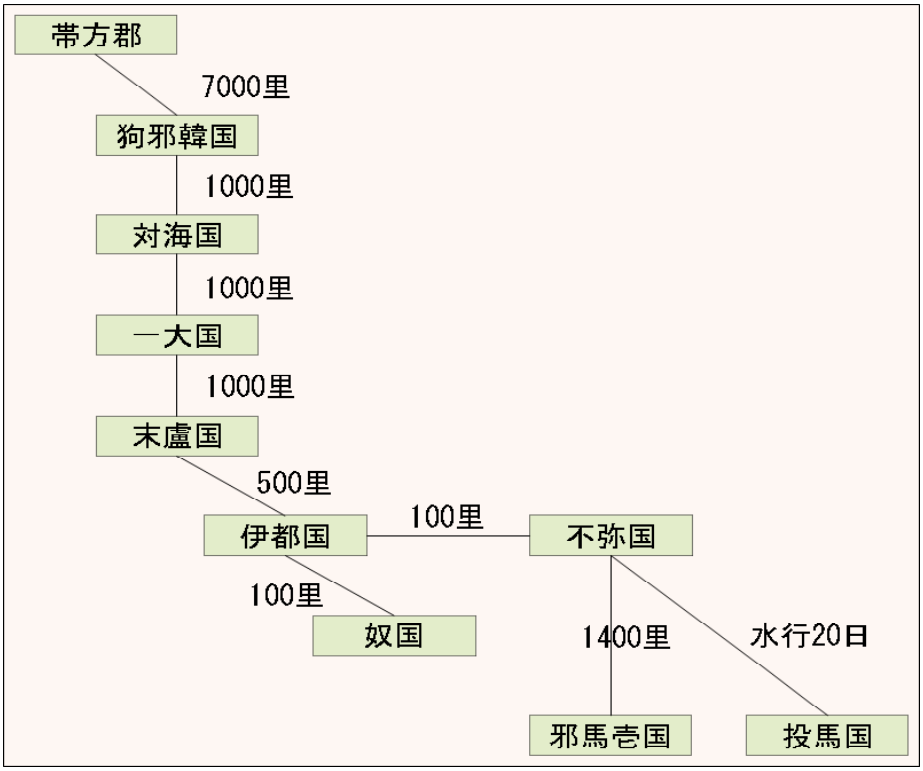
この場合の女王国の候補地は朝倉盆地・筑紫平野から熊本県北部となる。不弥国を福岡県飯塚市と見做しても、候補地は大きくは変わらない。

これを行路図で表すと、次のようになる。

---

*1)　『「邪馬台国」はなかった』（古田武彦、朝日新聞出版、1992年）。

図1　道行き記法に不弥国から女王国への里数値を反映した行路図



これを地図で表すと、次のようになる。

図2　女王国および関連図

ここでは女王国を福岡県旧八女郡(現八女市を中心とした地域)としているが、これについては後で述べる。

道行き記法は『漢書』西域伝の記法と完全に一致している訳では無いが、親和性は非常に良く、陳寿の編纂方針と合致している蓋然性はとても高いと思われる。少なくとも『漢書』西域伝と『魏志』倭人伝を突き合わせてみても、記述の矛盾は特に見当たらない。

また、道行き記法に近い考え方である放射説(放射記法)であれば、想定文は次の通りとなる。

・南[千五百里]至邪馬壹國［自郡至]女王之所都水行十日陸行一月

この場合は伊都国から1500里の地点に女王国がある事になる。榎説では水行十日陸行一月の箇所を曲解してしまっていたが、これで榎説は問題が解消されたものと思われる。不思議な事に、榎説における女王国の比定地(福岡県旧三井郡)とは非常に近い事になる。

ところで、定説では奴国と見做される須玖遺跡群(古田説では女王国)はこの図ではどこの国に属するのかと言う事になるが、これも後で述べる。

2　道行き記法をヤマト説に適用する

道行き記法は九州説に限定されるものと思われるかも知れないが、実は関西説(ヤマト説)に適用する事も可能ではある(第303号で触れている)。不弥国からの方位を何らかの理

由で誤認したと言う前提が必要となるが、次のような読解自体は出来るものと思われる。

(1) 不弥国から日本海を航行して女王国に至ったが、不弥国から分岐する行路にある瀬戸内海の投馬国(つまり吉備)を伝聞により記述した

(2) 不弥国から瀬戸内海を航行して女王国に至ったが、不弥国から分岐する行路にある日本海の投馬国(つまり出雲)を伝聞により記述した

これをそれぞれ行路図で表すと次のようになる。

図3　道行き記法をヤマト説に適用した行路図1

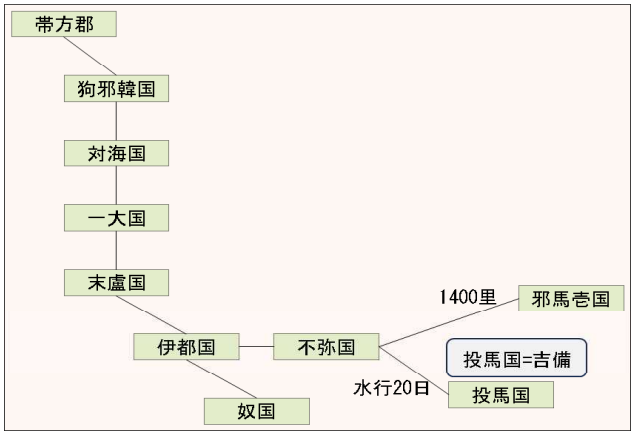
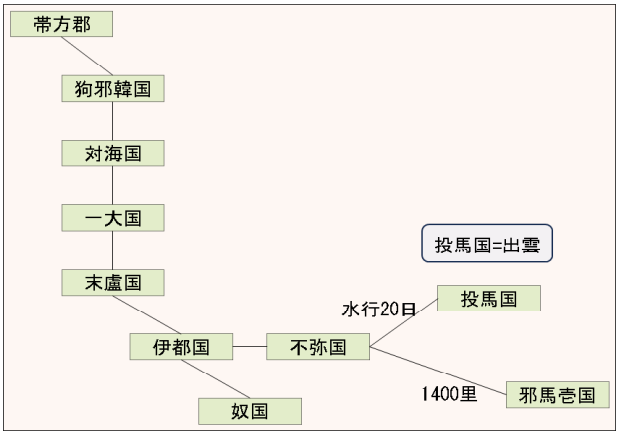


図4　道行き記法をヤマト説に適用した行路図2



道行き記法を適用すれば、行路図の上ではヤマト説も成立するように見える。もっとも、

・末盧国から伊都国への行路を何故陸行したのか？

・不弥国から女王国への距離が1400里しか残っておらず、奈良県まで距離が届かない

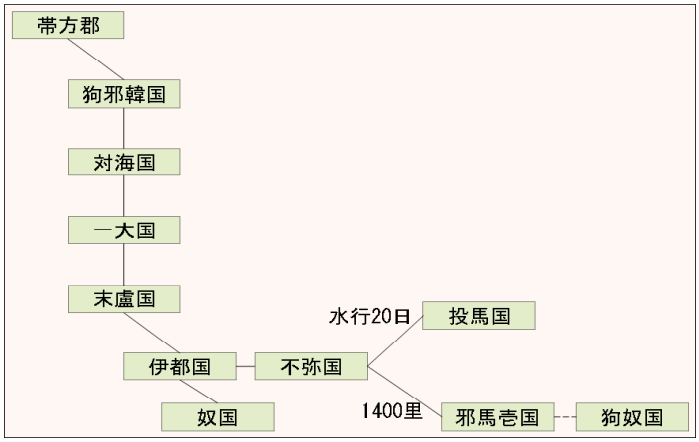
・不弥国から女王国までの間に他の国は存在していなかったのか？

と言う幾つもの疑問を解決する必要があるが、解消出来るのであれば行路の読解として成立するのであろう。ただ、不弥国から女王国までの距離が1400里と言う点から判断すると、女王国はヤマトでは無く出雲か吉備と見做した方が自然な読解ではある。女王国=出雲説や女王国=吉備説を主張されている論者はおられるようなので、その研究者に利する事になるのかも知れない。更に述べると、投馬国=ヤマト説(女王国:出雲)もしくは狗奴国=ヤマト説(投馬国:出雲、女王国:吉備)と見做す見解があるのかも知れない。もっとも、その場合は次の行路がどこを指しているのかと言う別の疑問も生じる事になる。東を北と読み替えるのか、それともこの箇所の東は正しいと見做すのかで海を渡った倭種の国の比定地が変わるのかも知れない。

・**女王國東渡海千餘里 復有國 皆倭種**(『三国志』『魏志』倭人伝)

狗奴国を追記した行路図も参考として掲げておく。

図5　道行き記法を狗奴国=ヤマト説に適用した行路図



ただし、道行き記法をヤマト説に適用した場合には別の疑問も生じてしまう。

つまり、

疑問:船で移動している間、ずっと方位を間違え続けていたのか？

と言う事だ。

投馬国や女王国へ至る行路の方位を誤っていると主張する者は

多い[*1]が、不弥国を出立してから女王国に至るまで、東に進んでいるのに方位を南と誤認し続けたと言う不可解な状況を肯定せざるを得ない事になる。魏使一行は方位磁針[*2]や指南車を持ち込んでいたかどうかは何とも言えない[*3]ので方位を間違える事はあったかも知れないが、それでも間違えるのであれば何かしら理由がある筈だ。例えば、

・又渡一海千餘里 至末盧國 有四千餘戸 濱山海居 草木茂盛 行不見前人

(『三国志』『魏志』倭人伝)

草木の丈が長いのか鬱蒼としていて前を進んでいる人が見えないと言う状況なので、これでは方位を間違えても仕方が無い状況ではあるが、少なくとも日没と日出には西と東は分かる訳で、方位を誤認したとしても翌日には誤認がリセットされる筈だ。短距離の陸路を移動する行路では方位を間違える事はあるのかも知れないが、不弥国から女王国までの移動の間、ずっと方位を間違え続けていたと言う主張は「学者は現場を知らないので机上の空論を宣う」と言うが如き状況ではあるまいか？　しかも海であれば視界を遮る物は無い。つまり不弥国を出立して以降は方位を間違えない筈であり、そもそも海で方位を失ってしまうと遭難してしまう。少なくとも海路による長期の行路で方位を誤認したと言う論説は、現実的では無さそうではある。あるいは、日本海を東北東に移動した場合はその後若狭湾を南に移動する事になるが、東北東に移動した事を忘れてしまったのであろうか。

なお、『和漢三才図会』[*4]には指南車が描写されているが、少々奇怪で何を描いているのか良く分からない。絵図の指南者(南を指している者の像)の下部は鏡餅のように円盤状の物体を重ねて積み上げているように読み取れなくも無いが、指南車は車輪の組み合わせによる車輌であったようだ(以前には方位磁針であると言う見解もあったらしい)。『史記』[*5]に記録が残っているので、少なくとも西漢朝の時点では存在していた事になる。絵図を見る限りではかなり複雑な器械に映るが、開発に費やした労力を方位磁針(指南魚)の発展に向けた方が良かったように思ってしまうのは、後代の羅針盤の歴史を知っているからと言うべきか。

一寸千里法

名古屋市　石田　敬一

私は、アナログの測量からデジタルによる測量に大きく変わる時期の５年間、測量の実務に携わり、アナログとデジタルの時代の両方の測量を経験し、ＰＣで作図のソフトも自作していましたので、閉合誤差などの測量に関して一般の方よりは知識があります。

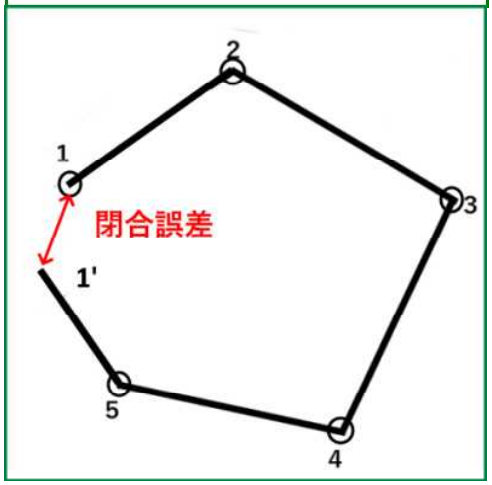
三国時代、３世紀頃の測量に関する概念や現地測量の実態は不明で、また『魏志』倭人伝には、具体的に帯方郡から邪馬壹国に至るまでの測距についての記事がないため手がかりは少ないですが、その行路を探る上では重要なことですので自らの経験や感覚を交えて『魏志』倭人伝の時代の測距の方法を推測するとともにその問題点を探りました。

---

*1 例えば『古代国家はこうして生まれた』(都出比呂志編、角川書店、1998年)等。
*2 ここでの方位磁針は三世紀頃に存在していたかも知れないと言う指南魚を指す。「元祖コンパスは魚の形(https://www.jasnaoe.or.jp/mecc/fushigi/report/report028.html)」(日本船舶海洋工学会 海洋教育推進委員会)の図が分かり易い。
*3 指南車は車輌なので人が押すか車輌で牽引しないと運用出来ないが、前提として平地で使用する車輌のようであり、道路が整備されておらず馬車も存在していない倭国に持ち込んでも正常に動作しなかったのでは無いかと考える。
*4 『和漢三才図会』(寺島良安、1712年)。
*5 西漢朝 司馬遷撰『史記』。

１　閉合誤差

コンパス測距儀



測量には必ず誤差が伴います。たとえば、山野で測量する場合は、コンパス測量が使用されました。

最初の測点の真上にコンパス測距儀を設置し、コンパスに示された次の地点の方位を目視で読み取り、２点間の距離をスチールテープ等を引っ張って目視でそのテープの目盛を確認します。方位と距離を測量手帳に書き留めます。同様にして数点の測点を測定して、スタートの位置に戻ります。

測量終了後にその測量データで作図すると必ず閉合しません。つまり、最後の測点はスタートした位置になりますので、同じ位置に一致しなければなりませんが、図面上では、ピッタリとは一致しません。これが誤差です。

かつて、林野地におけるコンパス測量では、１／60の誤差であれば許容範囲とされていました。

その誤差を、各測点に分散させて閉合することで作図します。１／60の誤差というのは、60ｍを測り１ｍ以内であれば妥当とするものです。林野地はおよそ広大であり起伏も激しいので、その程度の測量で良かったわけです。また、平地では狭い範囲の地図作成に平板測量などアナログ的な測量が使われていました。

長年にわたり、測量は、このようにアナログな道具と手作業で行われてきましたが、近年はデジタル技術の発達によってその方法が劇的に変化し、レーザー距離計を備えたトランシット（経緯儀）やデジタルセオドライトやトータルステーションという光学機器が登場し、およそ１／20,000以上の精度となりました。

10kmの距離を測量しても50cmも違わないという正確さです。距離の測定が光波で行われ、機器はセンサーで調節し手が触れないために微動しないことと、測量データが自動的にメモリーに記録されるので、間違いも誤差も少ないのです。人間が確認するのは、測量機器が測点の真上に立っているかどうかを目視するのと、次の測点のターゲットを正確にレーザーが捉えるかどうかだけです。

２　測量の起源

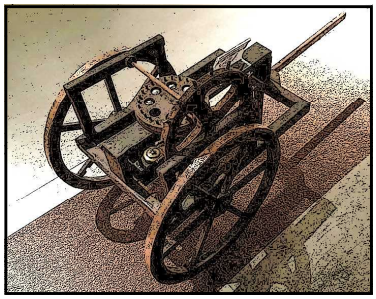
測量の起源は、紀元前３千年の古代エジプトとされます。

エジプト文明が発展したのはナイル川の氾濫があって肥沃な場所があったからです。

ところがナイル川の氾濫によって、土地の境界が分からなくなってしまうので、測量技術が発達したそうです。古代エジプトの測距は、「ロープストレッチャー」と呼ばれる方法で、測量したい土地の一端から、目印が付いた縄を引っ張り目印の間隔によって距離を測定します。面積は３：４：５の直角三角形などを利用しました。ただし、この方法は遠距離の測距には適しません。

私が山野で次の標柱を見つけるのに使っていたのは、歩測です。当然、古代エジプトでも実地には使用していたことでしょう。私の場合は、４歩で３ｍなので「１，２，３，と」で４歩の歩数を数えて３ｍ進んだとして、次は「４，５，６、と」と４歩を口ずさんで６

mに達したと言う調子で、目的の歩数に達したところで周囲を見渡し、草陰に土中に隠れた標柱を探す作業をしました。私の「４歩で３m」はかなり正確なので、これでも測距ができます。ただ、長い距離はやはり誤差が大きくなります。



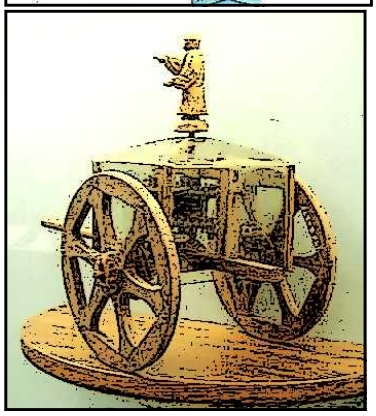
そこで、古代ギリシャでは機械的に距離を計測することができる車輪が付いたオドメーターが発明され、それを馬に引かせることで長距離の測距を行いました。平坦地ならば、ある程度有効であったかもしれません。

左：オドメーター・走行距離計
（ギリシャのテッサロニキ科学センターの復元）

３　周や前漢での測距

周（紀元前1046年頃～紀元前256年）や前漢（紀元前206年～紀元後８年）では、２点間の距離を知るための知識が備わっていたようです。

古代中国では、車輪の回転数による測距機器、「記里鼓車（きりこしや）」が発明されて、平坦な地上はこれで距離を測定できます。
古代ギリシャのオドメーターと形がよく似ています。
左：記里鼓車



また、方角は、磁針ではなく、左右の車輪の回転の差から方位を定める「指南車（しなんしや）」が使われたようです。

資料がないので、どの程度の正確さがあるかよくわかりませんが、これも平坦な場所でなければ、随分と精度が落ちるのではないかと思われます。

遠方の場合などは太陽の位置などで確認したほうがよさそうです。
左：指南車

『魏志』倭人伝において九州に上陸してからの測距には、このような「記里鼓車」や「指南車」が使用されたかもしれませんが、この方法は地上を移動させるものですから、狗邪韓國から末盧國までの海上の測距は不可能です。

４　一寸千里法

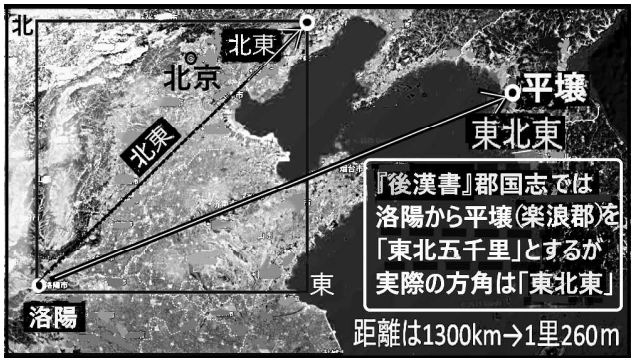
古代において、遠方の２点間の距離をどのようにして測定していたのか気になります。

古代の測量法の一つに**「一寸千里法」**があります。

「一寸千里法」は、古代中国で考えられたとされる測量法の一つで、棒の影の長さの差を利用して距離を測定する方法です。夏至の太陽南中時に、周の陽城（洛陽）付近の南北２地点で影の長さが一寸の差であれば、その距離は千里に相当するという原理に基づいています。この方法は、周代の天文数学書『周髀算経（しゅうひさんけい）』に記載されており、紀元前139年成立の『淮南子（えなんじ）』にも「一寸千里法」が記されていることから、紀元前にはすでに周知されていたと考えられます。

具体的には、南と北の２地点が同じ経線上にあることと、棒の影の長さを同時に測定することが条件であり、そうした測定でないと正確な値は得られないので、測定場所により結果が大きく影響されます。

また、『周髀算經』や『淮南子』の時代は、地上が平面と考えられていました。実際には地球が球体ですから、緯度が変わると日影長一寸に対する地上の距離は変わってしまいます。特にその２地点が東西に離れているとさらに実際の距離とは乖離します。それでも、２地点がおよそ同一の経線、つまり南北に近い関係であれば、およその距離が把握できますので、遠距離などの場合には重宝された測距法であったと思われます。



たとえば、『後漢書』郡国志には、洛陽から平壌（楽浪郡）までを「東北五千里」と記されており、このように遠方の場合には、「一寸千里法」によって距離を測定したはずです。

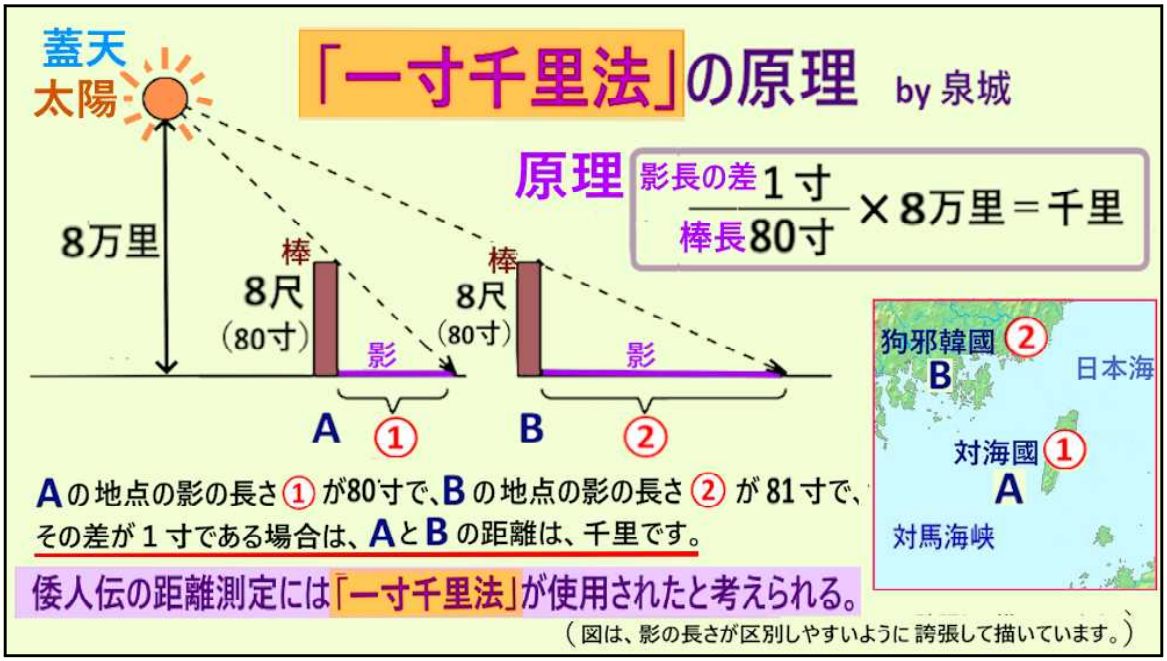
ただ、この事例も、実際は北東の方向ではなく東北東であり、これを四分法によって「東」として「東五千里」と記すこともありえますので、常に方角の表示には曖昧さがつきまとい、正史に記述された方角は正確さに欠けるということになります。

ですから、倭人伝の遣使にいわば測量士が同行し「一寸千里法」を使用して測定しても、行き先の方角によっては、地点間の距離がずれてしまいますので、その方角の正確さが問題になります。また、その方角がどの程度正しく記述されたかも問題になります。

『三國志』の『魏志』倭人伝に記される、①狗邪韓国から対海国、②対海国から一大国、③一大国から末盧国までの距離をそれぞれ「千余里」と記していますが、末盧国を唐津や呼子に想定すると、③の距離は、①や②より明らかに短いです。それで、これらは、倭人による日数を換算したとの意見があります。しかし、①、②、③は、倭人が遣使に報告したものとは考えられません。というのも、倭人が伝えたのであれば、倭人は「日をもって計る」のですから伝えられたそのままの日数で示されたはずです。

また、海上においては航海速度を距離に換算したという仮説もありますが、対馬海流などの潮流の影響が大きいところでの航海速度は一定ではありませんから、これも妥当であるとは思えません。

倭人伝には倭の邪馬壹國までに至る主な国々の距離や方角が記されていることから、魏の遣使一行の目的は、これらを確認することが役割の一つと考えられます。その測距の精度が現代人からすれば正確ではなかったとしても、当然一行に専門の測量士が同行し、測距した結果を遣使に報告し、それが『魏志』倭人伝に反映されたとみるべきでしょう。

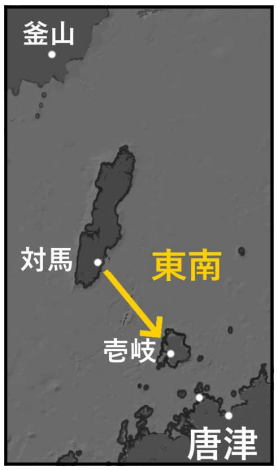


私は、魏の測量士が使用していた測量法の一つがこの「一寸千里法」だと考えます。特に２地点間が離れていたり、渡海の場合はもっぱらこの測量法を準用したと思います。

この原理は、上に示した図のとおり、比例の原理に基づいています。理論的には先にも示したとおり夏至の太陽南中時の南北の２地点で八尺の棒の影の長さを同時に測定し、両地点における影の長さの差が一寸であれば、その２地点の距離を千里とするものです。

２地点がほぼ同じ経線上の南と北にあれば、この原理の精度は比較的高いと考えられますが、問題は、異なる経線、要するに２地点が南北に離れているのではなく、東西に離れている場合には、棒の影の長さに違いがあまり生じません。つまり、この方法は使えず、ベクトルを南北と東西の要素に分解して計算で算出する必要があります。したがって南北の長さは「一寸千里法」で確認したとしても、東西の距離については、方角の精度に大きく影響されますので実際の距離とは乖離する可能性が高まります。

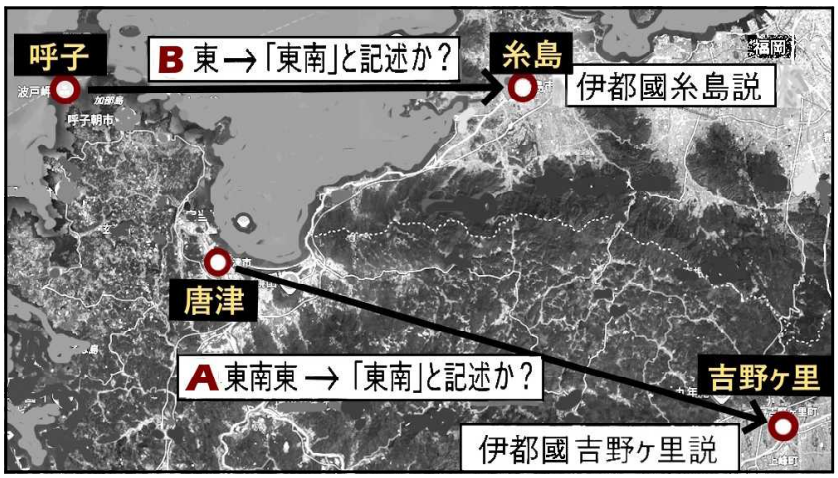
５　方角の問題



方角については磁針ではなく、先述の「指南車」で輪の回転で測る場合があるようで、その精度は不明です。

対馬から壱岐の実際の方角は、八分法で示せば「東南」ですが、**『魏志』倭人伝では、対海國から一大國までの方角を「南」**と記されています。倭人伝では「東南」を「南」に丸めて「四分法」で記したという古田武彦説などの解釈があります。しかし、対海國から一大國までは「四分法」を使いながら、末盧國から伊都國を「東南」と「八分法」で記していることから古田説による説明には説得力がありません。

さらに、**『隋書』俀国伝では、都斯麻國から一支國の方角を「東」**と記しています。つまり倭人伝では「南」であったものが俀国伝では「東」です。太陽の位置から、ある程度正確な方角である「東南」は分かっているはずですが、中国史書に記された方角には、誤差では片付けられないほど大きなブレがあります。こうした記述にブレがあることを前提にすると、中国史書に書いてある方角を厳密になぞる意味は薄れ、方角は参考程度ということになります。



末盧國を唐津と想定した場合、「東南」は明らかに佐賀平野の方向であり、たとえば、伊都國吉野ヶ里説では、唐津から吉野ヶ里の実際の方角Ａは「東南東」ですが、この方角を『隋書』に照らして「東」と表現する人もいるでしょうし、他方でこの「東南東」を「東南」と記す場合がありうるので、この場合には伊都國吉野ヶ里説が優位です。また、伊都國糸島説では、たとえば呼子から糸島の実際の方角Ｂは「東」ですが、これを「東南」と記すこともあり得るということになります。

すなわち、中国史書の記述では、編纂者が方角を丸めて記述するなど、実際と45度程度の方角の違いを生じてしまうことが起こりうると思われます。ですから、倭人伝の方角について、現代人の感覚で厳密に捉え、論理立てても残念ながら邪馬壹國の場所を特定する目安の一つにしかなりません。行程だけではなく、弥生時代の矛・鏡・絹・その他の考古学的資料の出土物が集中している遺跡との関連が重要になると考えます。

令和七年（2025年）の会報内容一覧

293 7年1月	2025年年頭にあたって	畑田寿一
	獲加多支鹵はウェカタシロ(ユカタシロ)と訓む(1)	堀口啓一
	天日槍伝説と三宅連氏	大島秀雄
	『日本書紀』を720年代の人々はどのように読んでいたか？	酒井　誠
	7世紀の旅行と貨幣経済	畑田寿一
	あらためて「其國境東西五月行南北三月行各至於海」	石田泉城
294 7年2月	『隋書』のたい国は熊本	田沢正晴
	獲加多支鹵はウェカタシロ(ユカタシロ)と訓む(2)	堀口啓一
	獲加多支鹵と夜摩苔	大島秀雄
	『日本書紀』の真実	酒井　誠
295 7年3月	古代の天文と農事暦	畑田寿一
	獲加多支鹵はワカタケルとよむ	田沢正晴
	獲加多支鹵はウェカタシロ(ユカタシロ)と訓む(3)	堀口啓一
	新･ワカタケル考	石田泉城
	(『姓氏家系大辞典』の安倍臣の項の「武淳川別の東海征伐」の内容)	大島秀雄（当日配布）
	(3月の論考を読んで)	酒井　誠（当日配布）
296 7年4月	日本古代の年譜	畑田寿一
	気になる著名な学者たちの提唱	石田泉城
	神社本殿の起源と変遷	酒井　誠
	梯儁と卑弥呼は会っている－拝仮は相見を含意する－(1)	堀口啓一
297 7年5月	応神天皇の実在性について	大島秀雄
	『日本書紀』から『日本後紀』までの六国史を読んで	酒井　誠
	梯儁と卑弥呼は会っている－拝仮は相見を含意する－(2)	堀口啓一
	稲荷山･江田船山の両鉄剣と「人制」	石田泉城
	縄文人と犬	石田泉城
298 7年6月	『後漢書』の邪馬壹国を読む	田沢正晴
	日本における寺院建築の変遷と神社建築　その1	酒井　誠
	梯儁と卑弥呼は会っている－拝仮は相見を含意する－(3)	堀口啓一
299 7年7月	『神話』の世界	石田泉城
	『古事記』の国生み神話の謎	田沢正晴
	日向神話の舞台を探る	大島秀雄
	卑弥呼はヒミヲと訓む(1)	堀口啓一
	大社造り	石田泉城
300 7年8月	卑弥呼はヒミヲと訓む(2)	堀口啓一
	城山八幡宮と「連理木」	石田泉城
	愛知サマーセミナーの公開講座の状況報告	(事務局 石田)
301 7年9月	『魏志』倭人伝との付き合い方(1)	宮澤健二
	三角縁神獣鏡は卑弥呼の鏡か	田沢正晴
	「卑奴母離」考	大島秀雄
	卑弥呼はヒミヲと訓む(3)	堀口啓一
302 7年10月	『三國志』魏書･倭人条の邪馬壹国までの道行きについて(Ⅲ)	林研心
	『魏志』倭人伝との付き合い方(2)	宮澤健二
	『漢書』西域伝と至＊＊記法	堀口啓一
	『先代旧事本紀』や『和名類聚抄』に見える蘇我氏の深淵	石田泉城
303 7年11月	生口十人で洛陽に朝貢の謎	田沢正晴
	邪馬台国への1万2千里再考	大島秀雄
	連続説の是非	堀口啓一
	陳寿の忖度と范曄の誤認	石田泉城
304 7年12月	倭と倭人(1)	宮澤健二
	放射説と榎説の是非	堀口啓一

＊＊

■ 前回の会報の目次と話題

・倭と倭人（１）　　小牧市　宮澤健二

・放射説と榎説の是非　　吉川市　堀口啓一

■ 投稿締切り日　１月２９日(木)

送付先　toukaikodai@yahoo.co.jp　石田

■ 例会の予定

1　日時　令和８年**１月１７日(土)１３時半**

2　場所　名古屋市市政資料館　第４会議室

3　次々回以降の予定

2/14、3/14、4/18、5/9、6／13